

## P2-058

## 特別支援学校の医療的ケアにおける看護師の役割と教諭、養護教諭との連携—看護師、教諭、養護教諭の調査結果の比較—

二宮 啓子<sup>1</sup>、山本 陽子<sup>1</sup>、岡永 真由美<sup>1</sup>、市之瀬 知里<sup>1</sup>、内 正子<sup>2</sup>、勝田 仁美<sup>3</sup><sup>1</sup>神戸市看護大学、<sup>2</sup>神戸女子大学 看護学部、<sup>3</sup>兵庫県立大学 看護学部

## 【目的】

本研究は、特別支援学校の医療的ケアにおける看護師の役割と教諭、養護教諭との連携について明らかにすることを目的とした。

## 【方法】

全国の肢体不自由特別支援学校425校の看護師、教諭、養護教諭の各1名に無記名自記式質問紙調査を行った。内容は、看護師の役割の実際と期待、看護師、教諭、養護教諭の連携等であった。所属機関の倫理委員会の承認を得て行った。

## 【結果】

質問紙調査の回収数(率)は、看護師159名(43.7%)、教諭145名(39.8%)、養護教諭158名(43.4%)であった。

1. 看護師の役割と役割期待についての看護師、教諭、養護教諭の認識：看護師が実際に果たしている役割は、3者とも、ケア技術の実施、児童生徒の健康状態に関する判断、ケア技術の確認の順であった。4番目については、看護師は「専門知識・資料の提供」であったが、教諭と養護教諭は「ケア技術指導」であった。また、教諭と養護教諭は、看護師が果たしている役割以上に役割期待をしていた項目として、専門知識・資料の提供を挙げている。

2. 看護師と養護教諭、教諭とのコミュニケーション：毎日の児童生徒へのケアの実施に際して養護教諭とコミュニケーションがとれていると回答した看護師は91.2%、あまりとれていないは8.2%であった。一方、看護師とコミュニケーションがとれていると回答した養護教諭は95.6%、あまりとれていないは2.5%、全くとれていないは0.6%であった。また、教諭とコミュニケーションがとれていると回答した看護師は95%で、あまりとれていないは4.4%であった。一方、医療的ケアを実施している教諭において看護師とコミュニケーションがとれていると回答した者は98.3%であった。さらに、医療的ケアを教諭と一緒に実施している看護師、指導看護師の方がそうでない看護師に比べ、コミュニケーションが十分とれていると回答した者が多い傾向が見られた。

## 【考察】

医療的ケア経験の長い看護師を対象としたことから、児童生徒の健康状態に関する判断を教諭、養護教諭に伝えることができ、コミュニケーションが良好であったため、3者の上位3つの看護師の役割についての認識が一致していたと考えられる。また、教諭や養護教諭が望んでいる専門知識・資料の提供を看護師が果たすためには、常勤看護師の配置や看護師の研修の充実、看護大学等の地域資源の活用が必要であると考えられる。

本研究は科学研究費補助金基盤研究Cを受けて実施した。

## P2-059

## 小児医療の現場における多職種連携の現状と課題：医療従事者、保育士、教師間のフォーカスグループインタビューから

甲斐 恭子<sup>1</sup>、濱中 喜代<sup>1</sup>、小林 京子<sup>2</sup>、小野 鈴奈<sup>3</sup>、谷川 弘治<sup>4</sup><sup>1</sup>岩手保健医療大学、<sup>2</sup>聖路加国際大学、<sup>3</sup>総合母子保健センター 愛育病院、<sup>4</sup>西南女学院大学

## 【目的】

研究者らは、2010年より小児医療の現場で活動する保育士や教師の専門性の向上を目的とする多職種交流研修会を開催してきた。その中で、小児医療の現場で協働する看護師や保育士、教師は同様の支援を実践することがあり、その支援の専門性には共通する部分としない部分を複雑に併せ持ち、お互いの職種を深く理解し協力できるような対応策を必要としていることが明らかとなっていた<sup>1)</sup>。そこで、小児医療の現場で活動する多職種がどのように連携・協働しているのかを共有する目的の研修会を開催したところ、多職種連携における現状と課題が明らかとなったので報告する。

## 【方法】

本研究は、質的帰納的研究で、2016年に関東圏内で開催した「小児医療の現場で多職種が協働していく為に求められる力」と題した研修会(午前・午後各90分)の内容を参加者の承諾を得てICレコーダーとビデオカメラに記録、逐語録にした。逐語録から多職種連携・協働における現状と課題に関する内容を抽出し、看護師・保育士・特別支援教育の経験のある教師でテーマに沿って分析した。研究参加者は、2010年より年に複数回開催している「病気の子どものトータルケアセミナー」の2011年から2013年の間(研究費補助金基盤研究(C)課題番号23531321)の参加者で、その後の研究協力に同意のあった者および今回の企画に賛同して集まった者であった。

## 【倫理的配慮】

参加者へ研究の趣旨、自由意志による参加、途中辞退の権利、プライバシー保護などを文書と口頭で説明、自署にて同意とした。また、今回の企画は、西南女学院大学倫理審査委員会の承認を受けた課題番号23531321の追加調査のため、その規定に準じて実施した。

## 【結果および考察】

研究参加者は、看護師1名、保育士2名、教師6名の9名で、語られた内容の殆どが連携に関するものであった。連携に注目して分析した結果、多職種での連携の現状には各職種の雇用環境などの「小児医療の現場の複雑で多様な状況」が深く関係していた。また、複数の専門職で同様の支援が可能であるからこそ、あえて各職種の支援内容をすみ分けたり位置づけたり、「職種の違い」を意識していた。これらの結果は、小児医療の現場で活動する職種間の理解を深め、連携・協働の方法を改善する一助となると考える。本研究は、研究費補助金基盤研究(C)課題番号15K04581の一部である。